

# 発達障害者への教習支援

森野利子  
(株式会社 瀬田月輪自動車教習所)

## はじめに

2012年、文部科学省の調査において、全国の公立小中学校に通う児童生徒の中で、6.5%が発達障害の可能性があるという結果が出た。そして2022年の同調査では8.8%と2.3ポイント増加が見られた。この要因として、発達障害の児童生徒が増加したというよりは、発達障害に対する社会的な認知が進み、本人、保護者、学級担任等が対象者に気づきやすくなったからではないかと言われている。当所においても、運転免許相談会や入所申込時に発達障害であることの申告や相談が増加傾向にあるのを実感している。

また、私が携わっている業務の中に『運転免許つばさプラン』の教習がある。『運転免許つばさプラン』とは、栃木県鹿沼自動車教習所が全国に先駆け取り組まれた、発達障害や軽度知的障害、その他の生きづらさ、社会生活の困難さを抱えている方の教習支援をするものである。2014年に誕生した『運転免許つばさプラン(以下、つばさプラン)』は、2018年に『つばさプラン全国研究会』が発足し、賛同した教習所が加入している。当所も2019年から加入し、現在、加入校は19校となった。(2023年11月現在)

『つばさプラン全国研究会』では、加入校の持ち回りで、定期的にZOOMによる事例報告会が行われ、各入校での教習支援の取り組み等の情報共有を行っている。

これらの側面を捉え、今後、より一層、教習に限らず、対人関係を行う中で発達障害に対する知識・理解というものが必要になると考える。本稿は、発達障害者教習支援を行う中で、主観的な部分もあるが、感じた事、留意している事について論じたものである。

## 発達障害の種類

発達障害には大きく分けて三種類ある。

### ① 自閉症・アスペルガー症候群を含む広汎性発達障害(PDD)

同じ行動を繰り返すなどこだわりが強く、他者とのコミュニケーションが苦手。感覚が敏感であったり、逆に鈍感さがあったりもする。自閉症は言葉の発達の遅れを伴うことが多いが、アスペルガー症候群は基本的に言葉の発達の遅れはない。

### ② 学習障害(LD)

知的障害や話し言葉の明らかな遅れはないが、「読み」「書き」「計算」などに著しく困難を示す。

### ③ 注意欠陥多動性障害(ADHD)

集中力が続かず不注意、状況を考えず動き回る、おしゃべりが止まらない、感情に対する反応が抑えら

れず衝動的に動いてしまう等がある。また、これらの症状に発達性協調運動障害(DCD)の併存率も多くみられる。発達性協調運動障害とは、年相応の身体の動きのコントロールができずに、日常生活に支障が出る場合に診断される。

ただ、障害の種類を明確に分けて診断することは困難といわれ、発達性協調運動障害のように、それぞれの症状が少しずつ重なり合っている場合も多く、年齢や環境の違いによっても特性が違ってくる。共通している事は、周りから特性に対する理解が得られないことや、適切な支援が受けられないことにより、社会的困難に陥り、対人恐怖、引きこもり、抑うつなどの二次障害を引き起こすこともある。(図1)

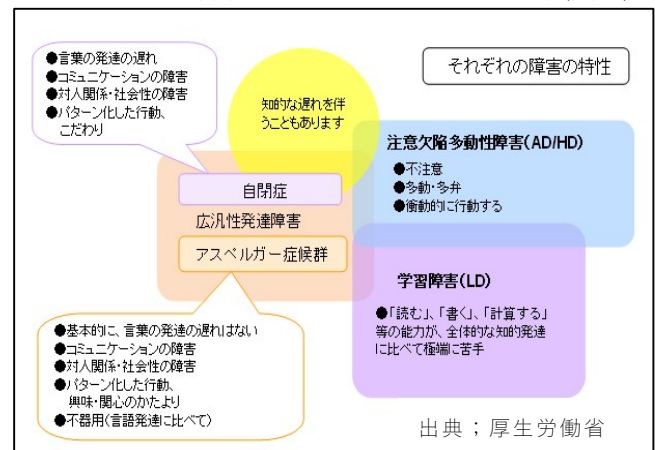


図1 発達障害の種類

当所でのつばさプラン利用者は在校生、卒業生、未入校含め合計44件である。(2023年11月現在)先述の通り、つばさプランでの入所希望者の抱える特性や困難さは一人ひとり全く異なるものである。そのため、問い合わせから入所するに至るまでには、一人ひとりの特性や困難さを把握するため図2のような流れで行っている。

事前面談での聞き取りで、当事者たちが不安を感じている点(複数選択可)は、

- ・学科に関して 65%
- ・技能に関して 54%
- ・指導員や他の教習生とのコミュニケーションに関して 38%

であった。以上のように学科において不安を感じているケースが半数以上である。また、技能に関する不安の中には、技能の習得状態の不安は勿論だが、閉鎖的な車内で、指導者とマンツーマンという状況下における不安も含めて考えると、指導員や他の教

習生とのコミュニケーションの部分にも関連してくると推測する。

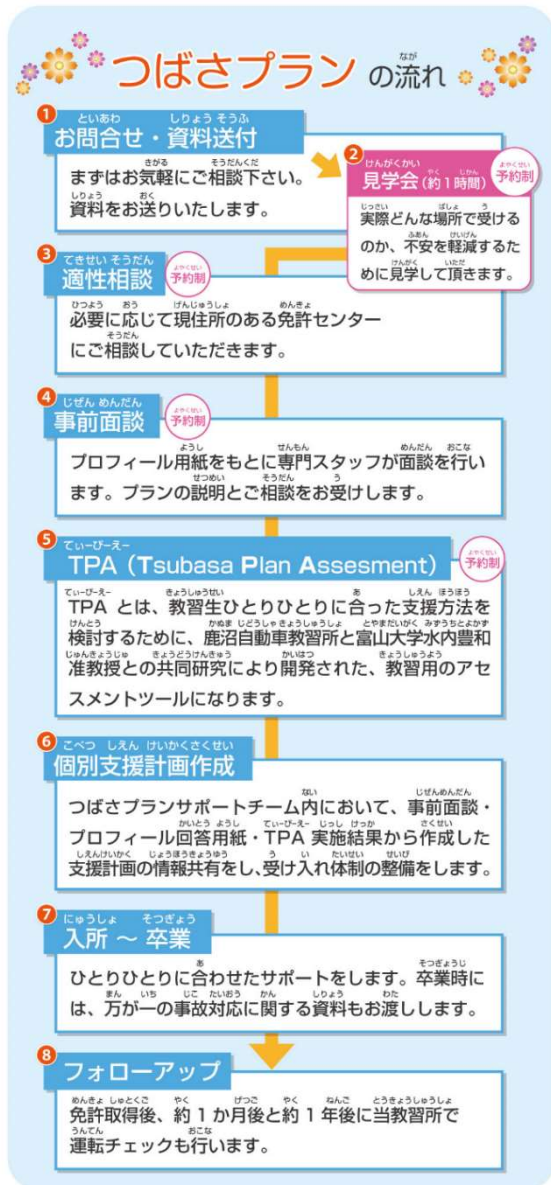


図2 つばさプランの流れ

### 学科教習支援

学科試験への不安の要因は、軽度知的障害により年齢に見合った学力の水準に満たないことによるものや、学習障害により文章を読み解く力が極端に不足している事によるものがある。

つばさプランのオプションとして、宿題管理がある。受講した学科項目ごとに宿題を出し、間違った問題の添削を行う。また、試験に向けて個別の勉強会を設ける。そこで、どの項目が苦手なのか、また、どのような問題につまずいているのか、傾向を把握する。

#### (1) ADHDによる事例

当所に入所する以前に他の教習所に通っていたが、仮学科試験に何度も不合格になり中退に至った。こ

の方の診断は注意欠陥多動性障害である。勉強会で間違った問題を解説したり、質問したりする中で、内容やルールを理解できている事が明確になった。集中力が続かない、不注意という特性から、問題を最後までじっくり読むことなく回答しているのではと考え、「問題を一問一問、最後の『。』までじっくり読んでから回答する」と決めた。結果、仮学科試験は一回目で合格、運転免許センターでの本免許学科試験は二回目で合格であった。

#### (2) 軽度知的障害による事例

他校で卒業後、運転免許センターでの本免許学科試験に数十回受験したが、卒業検定合格後一年以内に合格することができず期限が切れ、元々通っていた教習所ではなく、つばさプランのある当所へ入所するに至った。以前の教習所で仮学科試験は合格しているものの、宿題での問題の正答率は6～7割程度である。学科試験につまずく要因としてルールの理解以前に、文章の内容自体を理解できていない可能性も考えられるため、「わからない単語や文章の表現にはマークするように」と指示をした。一部ではあるが、以下のような部分にマークがつけられていた。(図3)このように文節の区切りがわからないケースや、「〇〇しないわけではない」といったような、二重否定を使った問題も苦手な傾向がある。

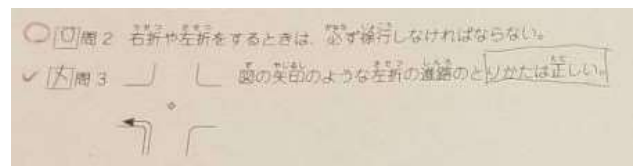


図3 回答例

以上のような事例をふまえて、学科試験の合格基準に満たないと言っても、理解度やつまずく要因は、一人ひとり異なるという現状があるので、どこに困難さがあるかを考察しその困難に見合った対策をたて、アプローチを行うことが必要と考える。

### 技能教習支援

次に、技能への不安の要因は、発達性協調運動障害の特性によるものである。幼少期から、歩き方や姿勢のぎこちなさ、字を書く、キャッチボールをする、靴紐を結ぶ等、スポーツや日常的な活動で困難さを抱えていることが多い。そして、協調運動にも関連して、空間認知能力や、想像力の乏しさも特徴である。また、コミュニケーションの側面においては、「あとちょっと」や「もう少し」といった抽象的な表現の理解に乏しい。ブレーキやアクセルペダルの踏み加減やハンドルのタイミング等、速い・遅い・強い・弱い・広い・狭い等の感じ方も一人ひとり異なる。このような特性を踏まえて、技能教習時の伝え方に留意をする必要がある。さらに、衝動性やパニックを起こす可能性も想定しておかなければならない。

#### (1) マルチタスクが苦手なケース

自動車運転の操作自体もマルチタスクではあるが、

技能教習開始直後から、ある程度運転操作が習得できるようになるまでは、運転操作をしながら指導員の指示を聞くことの困難さも課題となる。また、ハンドルを握る、回す、ペダルを踏むという作業への力加減も理解できていない上に、緊張も伴うので、コース内の緩やかなカーブの外周道路は勿論、直線部分であっても、いつでもハンドル・ブレーキ補助が可能のように構えが必要である。運転中のアドバイスや指示は届きにくく、負担がかかるので、車を停止させて、時にはイラストを用いながら、ゆっくり説明を行う。その際、できるだけ目を合わせるように心がける。また、理解できていない場合も「わかった」と答えるケースもあるので、「はい」「いいえ」で答える事のできるクローズドクエスチョンではなく、簡単な質問を交えオープンクエスチョンを活用し、理解度を把握する。

路上教習においては、状況把握・速度維持を同時に行わなければならない車線変更が課題となる。また、道路構造の変化に対応しづらく、駐車車両の回避、右折レーンへの進入も苦手である。慌てて、衝動的に操作をしたり、パニックを起こしたりすることを防ぐためにも、早めに状況の変化に対して声掛けをし、本人に認知させる機会を設ける。自主的な判断を行えるまでには基準よりも時間を要する。

### (2)空間認知の苦手なケース

空間認知と想像力の乏しさにより起因する困難は、方向変換・縦列駐車といった、所謂、後退時の車体の誘導と、S字・クランクといった狭路の走行である。

後退時の車体の誘導においては、後退しながら低速を維持し、工作物との距離感を測りながら行わねばならない。更に安全確認のため、後方へ意識を払いつつも、前方の外輪差にも注意しなければならない。ドアミラーを併用することにより感覚を補えるケースもあるが、この面においても習得に時間を要する。

狭路の走行では、先の道路形状を読み取り、前後輪の走行位置を意識しながら通過せねばならない。道路形状を読み取るための目線移動や、現実には見えていないタイヤがどの辺りにあるかをイメージしなければならないことが困難になる。そのため、全体の動きや誘導方法を把握するために、ミニカーとコース図を用いての説明を行う時もある。(図5)

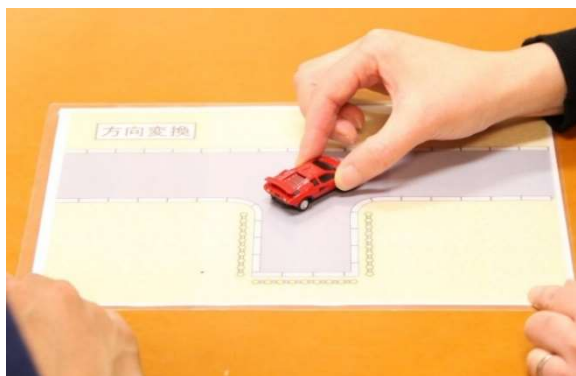


図5 ミニカーを用いての説明

### (3)抽象表現が苦手なケース

先述の通り、自動車運転の際、感覚は人それぞれであるが、安全な運転行動ができるようになるためには、どのくらいの距離で、どれくらい速度で、どんな力加減で等を理解する必要があり、伝え方は重要である。具体的には、前車との停止距離が近い場合は「もう少し前の車との距離を空けましょう」ではなく、「前の車の後ろのタイヤが全部見えるように空けて止まりましょう」や、「もう少し早めに速度を落としましょう」ではなく、コース内であれば実際に減速完了の地点まで移動し、「ここまでに時速10キロメートルまで速度を落としましょう」等、具体的な数値や距離を体験し、感覚を捉えるように導く。

### 教習支援における心理学の活用

最後に、学科や技能の教習指導のみならず、対人面の不安を緩和するために、心がけている事が二点ある。一点目は、信頼関係(ラポール)を構築することである。『運転免許つばさプラン』で入所する教習生は、本人の持つ特性の理解が得られない事や、学校生活においていじめや失敗体験、怒られた経験の多さから、教師や指導者という立場の者に対して、不信感や恐怖心を持ち合わせていることがある。二点目は、カウンセリングの際に必要な『受容』、『傾聴』、『共感』の技法を駆使することによって、安心して教習に向き合う時間が作れると考える。

#### (1)受容

教習における例としまして、まず、『受容』の側面から考えると、“相手に心から関心を持つ”ことである。障害の程度は一人ひとり異なるので、特性はもちろん、これまで歩んできた背景も含めて受容する。具体的な支援と対応は、入所前の事前面談において、成育歴を保護者同伴で面談を行う。かなり踏み込んだ内容になるため、一般の申込受付を行うカウンターではなく、つばさプラン専用の個室で行う。(図6)



図6 つばさプラン専用の個室

この面談により、診断の種類だけでなく、どのようにしてこれまで歩んできたのか？どこに困難さがあるのか？などを把握し、それに応じた対応を行う。また、高圧的な態度は取らないよう留意する。先述したとおり、学校生活において、怒られたり、いじめにあ



ったりと辛い体験や失敗体験が多く、指導者に対して不安感や不信感を抱いているケースが多いため、常に穏やか口調と表情で接するように心がける。また、指導者を身近な存在、安心できる存在、そして自分を認めてくれる存在に感じてもらえるようにできるだけ名前を呼ぶ機会を多く作る。

### (2)傾聴

次に、『傾聴』の側面からでいうと、教習開始時にはその日の様子を注意深く観察し、必要に応じてヒアリングを行う。つばさプランの教習生は気持ちの切り替えに時間がかかる方が多く、前日にあったことや、体調不良などがあると、教習に影響が出やすい傾向がある。まずは、明るい挨拶と共に、軽めの雑談を兼ねて前日の様子を伺う。具体的には、とにかく教習に来たこと自体を認め、労う。その上で、前日の様子を聴く。また、自分のことを話したい気持ちの強い方もいるので、教習に支障のない程度で、『この時計で何分まで』と約束ごとを決めて、ある程度満足するように話を聞く。

### (3)共感

最後に、『共感』の側面で述べると、その時々教習生の気持ちを考え、理解し、寄り添う。教習の最終目的は運転免許の取得ではあるが、つばさプランの教習生の方にとっては教習所に通うこと自体、かなりハードルが高く、思い切った一歩を踏み出していることになる。別の教習所での入所経験のある方は、そこでの失敗体験を乗り越えての入所となる。そのため、教習を通して「自分でもできた」という成功体験を積み、自身の成長を実感して自信を得ることも目的の一つであると考え。具体的な支援と対応は、目標達成したら我がことのように一緒に喜ぶ。そして、ちょっとした変化でも自身が実感できるように、「先ほどよりもカーブ中の速度がゆっくりできましたね。」「優先道路に合流する時など「遠くまでしっかり確認できましたね。」とできる限り具体的に褒める。褒めるのは誰かと比較して褒めるのではなく、本人の以前の運転や操作と比較して、できるようになった部分をしっかり褒める。また、目標達成ができなくても、目標達成に対してがんばって取り組んだ姿勢を認める。

以上のような点を日々意識し、できる限り家族以外で信頼でき、自分を理解してもらえる存在となるよう心がけ、教習支援を行っている。そして、教習所が安心して通える場所、心地いい場所に感じてもらえるように4名でチームを組み、常に情報共有を行い、対応している。つばさプランで卒業した方からは、「教習所に通う前は引きこもりがちだったのが、外出する機会が増えた」、「運転免許を取得できたことで自信がつき、自己肯定感が高まった」などの声を聴くこともでき、教習、また免許取得を通してソーシャルスキルやQOL向上の機会へつなげることも期待できると考える。

## まとめと今後の課題

以上の点に留意し、発達障害者への教習支援を行っている。前述したとおり、特性や抱える困難さは一人ひとり、全く異なる。教習における限られた時間の中で、一人ひとりとじっくり向き合い、観察したり、話を聴いたりすることによって、教習において何が苦手なのか？どの部分にやり辛さを感じているのか？を把握するよう努める。教習生に「なぜ、できない？わからない？」とベクトルを向けるのではなく、「どのようにすればできるようになるのか？わかりやすいのか？」と指導者である自分自身にベクトルを向けて試行錯誤することが重要だと考える。そして、このようなスタンスは発達障害者への教習時だけでなく、どの教習生に対しても有効である。

冒頭でも述べたように、この先、それぞれの教習所においても、発達障害であることの申告や相談は増加すると推測される。今後の課題としては、まず、職員全体への発達障害に対する基礎的な知識の伝達が必至であると考え。その上で、コーチングやカウンセリングの有効性を伝え、研修などを積極的にを行い、発達障害者だけでなく教習生一人ひとりの個性や特性に寄り添った教育の重要性を周知、実践することが必要である。

## 参考文献

文部科学省「通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)について」

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/2022/1421569\\_00005.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2022/1421569_00005.htm) (2023年11月1日閲覧)

厚生労働省「政策レポート(発達障害の理解のために)」  
<https://www.mhlw.go.jp/seisaku/index.html> (2023年11月1日閲覧)